

## 評議員のことは

# 真の国際化に向けて - 共生の時代 -

植田 兼司



日本人はshyだと言われる。内気、用心深い、尻込みする、といった形容がすぐ思い浮かぶが、こうした気質がある程度影響してか、我が国では永くボランティアは育たない、関心が低いなどとされてきた。だが今日よく言われるところの地球のボ・ダ・レス化が進み経済や文化の流動も顕著になるにつれ、日本人の中にも徐々に国際感覚が醸成助長されてきており、近年ではその活動においても片手間でない積極性、機敏性が見受けられる。(先の阪神淡路大震災で培われた非営利組織(NPO)の援助形態がその後続いた台湾大震災で間髪を入れず活かされたこと等がその好例であろうか)

顧みれば1923年9月に起こった関東大震災では、世界独立国57か国中50数か国つまり世界の殆どの国々が援助に名乗り出てくれた、中でも迅速さといひ規模といひ抜きんでいたのがアメリカである。ク・リッジ大統領命令によりアメリカ艦隊は援助物資を満載して横浜へ急行、募金は525万ドルに達し、官民挙げて自発的に、つまりボランティアとして日本の為に行動してくれた。この発想が国際協力における民間・個人としてのボランティア活動や、組織化されたボランティア(NGO)の活動へと結びついてくるのである。更に思い起こすのは日本が戦後の灰燼から脱却して復興し得たガリオア・エロア資金援助、また日本人が餓死を免れたララ・ケア物資の存在である。第二次世界大戦直後の日本は、まさに混乱と疲弊の只中であつたが、そこから立ち上がり経済大国への道を歩み出す上でこれらの果たした役割は計り知れない。1946年から51年にかけての6年間に我が国にもたらされた援助総額は約18億ドル、うち13億ドルは無償援助・贈与であった。このガリオア資金は第二次世界大戦後の米政府による占領地域救済基金で旧敵国を支援する為に設立されたものであるし、エロア資金もまた占領地経済復興資金なのである。恐れ入るほかない。

次にララ物資だが、ララは英語でLALA公認アジア救

済連盟を指す。戦後日本に米、加、中南米の各地から集まった資金や諸物資を取りまとめ送り出す窓口として1946年6月に一本化された組織をいひ、国際的ボランティア団体NGOである。

またケアは、1945年の終戦直後これもアメリカで設立されたNGOの一つで、48年日本に事務所開設、救援活動を開始した。以後55年かけて我が国に送られたケア物資は当時の金額にして5000万ドル、180億円に達し、これらにより助けられた日本人は凡そ1500万人にも上つたといふ。ケアは今日世界最大級の民間国際援助組織となり、年間3500万人以上を対象に支援事業を行っている。(前述の日本事務所は国際開発協力組織財団法人ケア ジャパンと改称し今日に至る)

以上振り返ってみるに、我が国の国状の変換ぶりには誠に今昔の感を禁じ得ないが、今後日本の国際交流・協力事業は、政府のみならず上記NGO・NPO等の幅広い国民各層からの参入があつて一層力強いものになっていくことだろう。まさに共生の時代である。

ところで渥美国際交流奨学財団の独自性は、これまで挙げてきたようなNGOのボランティア奉仕或いはケアにおける国際協力事業とは異なり、経済大国として主要先進国の一員となつた日本が現在最も不足しているのは人的な交流とその促進であろう事に着目した点にある。時代を担うグローバルな人材の育成をも視野に入れ、我が国の国際親善に寄与する事は今日の社会の要請にも叶ひ、内外を問わず高い評価を得、期待もされているのであるから、来る21世紀をも超えて受け継がれ発展されるよう願っている。

(弁護士)